

## 「信州 知の連携フォーラム(第5回)」 報告

### 『信州の未来を担う世代に、地域資源(史資料)の 大事さ・魅力をどう伝えるか』

中 野 亮 一 (長野県立歴史館学芸部長)  
村 石 正 行 (長野県立歴史館文献史料課長)  
宮 坂 到 (長野県立歴史館専門主事)

#### 1. はじめに

「信州 知の連携フォーラム」(以下、フォーラム)は、長野県内の各種文化施設(博物館、美術館、図書館、文書館などいわゆるMLA)が、「信州における価値ある地域資源の共有化をはかり、新たな知識化・発信を通じて、地域住民の学びを豊かにし、地域創生につなげていく方策について、議論する」ための場として、長野県信濃美術館(現長野県立美術館)、県立長野図書館、信州大学附属図書館、長野県立歴史館の四館館長連携のもと、2016(平成28)年発足した。

第1・2回のフォーラムは信州大学附属図書館中央図書館にて開催、第3回からは各館のローテーション方式となり、第3回は信州大学附属図書館、昨年の第4回は県立長野図書館が担当した。

このフォーラムは、MLA連携のもと、地域資源を広く学びに役立ててもらいたいという大きな目標では一致しているものの、中心となる業務内容・予算・人員・デジタル環境などさまざまな面で各施設で違いがある。そこで当館が担当となった第5回の内容を検討するにあたり、当館の中心的特色である「史資料の保存・収集」と「こどもたちへの展示解説」を活かし、『信州の未来を担う世代に、地域資源(史資料)の大事さ・魅力をどう伝えるか』をテーマとして設定することとした。

開催にあたり、新型コロナウイルス感染状況についてはまだまだ収束が見えない状況であり、リスク管理を第一に考え、対話形式のワークショップ開催を断念し講座形式とした。

第5回フォーラムは、令和3年11月11日(木)当館講堂にて開催し、56名が参加した。

#### 2. 開催概要

##### 2-1. プログラム

第5回フォーラムのプログラムは以下のとおりである。

開会挨拶	笹本正治(長野県立歴史館特別館長)
基調報告	「若者に古文書を残すということ」 村石正行(長野県立歴史館文献史料課長)
実践報告	「こどもたちに地域の歴史を伝えたいーお出かけ歴史館ー」 宮坂 到(長野県立歴史館総合情報課専門主事)

## 2-2. 所属別参加者数

	美術館・博物館	図書館	文書館	その他	合計
人数	33	21	1	1	56
%	58.92	37.5	1.79	1.79	100

## 2-3. 実施体制・開催準備

開催については、昨年の第4回フォーラム（県立長野図書館担当）において、次回は当館が担当することを表明し、内容の詳細案については、新築オープンとなった長野県立美術館において令和3年6月11日（金）に行われたフォーラム打合せ会議において、企画内容の協議、基本的方向性の承認が行われた。

実際の開催にあたっては、新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として、一般の方の参加見合わせ、関係四館及び各館が関係する長野県博物館協議会、長野県図書館協会、信州大学附属図書館等のネットワーク内のみの告知・募集とした。また会場の関係で、参加人数を80名制限とし、それ以上となった場合は、参加機関にお願いして調整を行うこととしていた。

## 3. 実施内容

### 3-1. 基調報告

当館村石正行文献史料課長が行った内容は、以下のとおりである。

#### 「若者に古文書を残すということ」

おかげさまで長野県立歴史館の古文書講座は毎年多くの受講生に参加いただいている。

しかし、全くの初心者にとって、古文書はかなり敷居の高いものである。なかなかとつきにくい。ましてや崩し字という、ミミズのはったような文字。これを読もうとするのはやはり覚悟が必要である。

当館では中高生むけの古文書講座をおこなっている。若い人にも古文書に親しんでもらう、というのが眼目だが、これは将来の地域資源をまもっていく担い手を作るという壮大な試みでもあると考えている。古文書は決して過去のものではなく、現在を映す鏡であり、未来を語る材料でもある。地域資源としての古文書は、まさに地域の来し方と未来を写すものである。若者たちが一人でもこの奥

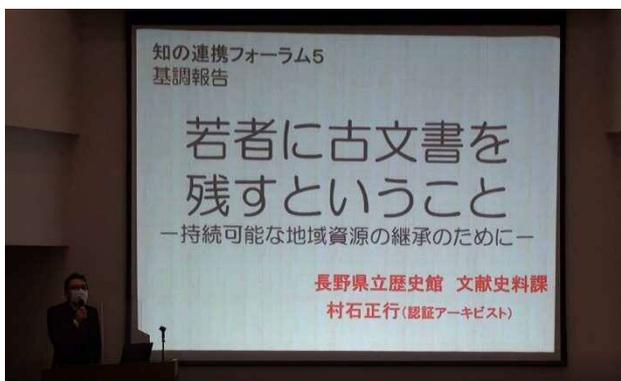


図1 基調報告

深さや楽しさを感じ、将来にわたってこれらを持続的に継承していこうとする仲間を増やしたいのである。

基調報告ではブレインストーミングとして、文字ではなく「かたち」から文書を見るワークショップをおこなったが、どのような感想をお持ちになっただろうか。中高生にとって、まずは「かたち」から古文書にアプローチする。文字は読めなくても、「かたち」から読み取る情報があることを少しでも感じていただけたなら、幸いである。

さて、われわれ資料を管理する立場の人間の喫緊の課題、資料散逸の問題がある。これが頭が痛い。年間数千万円以上の文書が売りに出ており、また消失していることは、ゆゆしき事態である。

平時の災害ともいえる地域資源（資料）の流出は複合的な要素が重なって発生しており、解決するための方策は簡単には見出すことはできない。しかし、地域の博物館・資料館・公文書館など日常地域資料と接する職員はまさにこの問題に日夜直面している。散逸に対する特効薬はない。課題解決には「短期的取り組み」と「長期的スパンでの取り組み」を両輪としておこなう必要があるだろう。

短期的には、「散逸資料セーフティネット」づくりができるだろう。まず、散逸史料の情報をデータ化し一覧・共有化する。県立歴史館が事務局である長野県史料保存活用連絡協議会ではメルマガを発行し、古書店で売られている長野県の地域資料の情報を共有化している。これをもとに当該市町村へ情報を届け、また購入等の働きかけをする。関係する自治体文化財担当者と連絡を取り合うことで、流出資料の情報（指定有無・調査有無・所蔵者情報など）を共有化し、購入の可否を検討してもらうのである。実際に何件も購入成立となっている。また、たとえ当該市町村で受け入れられなくても、地域資料への関心をもっていただける。最後の砦として県立施設の文書館・博物館などが購入を検討すべきである。従って、当面はそのための購入費は増額を要望していく必要がある。しかしこれは短期的処方であり限度がある。

むしろ地域の公文書館はより長期的な展望をもったプランを用意すべきだ。すなわち地域資料の散逸を水際で防ぐための活動である。古文書を学ぶ場の設定、しかもこれからを担う世代へのアプローチが大切である。未整理文書の整理や翻刻活動を、地域の人びとと協同でおこなうことが、地域資料に対する関心を深めることになるだろう。所蔵者とのコンタクトを地道に、そして長期に渡りとり続けることも大切だろう。そして持続可能な地域資源の保全のためにも、若者の協力は絶対不可欠なのである。

そのためにも図書館・博物館・美術館や公文書館が連携を十分にとることが求められる。その根っこには、共通の土台として「地域資源」を次世代へ継承する、という思いを共有することが必要だろう。MLA連携では、まさにこのような理念を大切にしていきたい。

地域の未来を展望すると暗い話題が多い。しかし、「地域資源」という点で何が協働できるのか、「地域資源」を根っこにおいた地域づくりを模索することは、困難な道筋ではあるが、未来を語るという意味で極めてポジティブな営みであると確信している。そして、将来の若者たちに地域資源をバトンタッチしていくことが、私たちの役割とと思っている。

### 3-2. 実践報告

当館宮坂到総合情報課専門主事が行った内容は、以下のとおりである。

#### 「こどもたちに地域の歴史を伝えたい ―お出かけ歴史館―」

お出かけ歴史館事業は、南信や木曾地域の、主に義務教育を受けている児童生徒を対象としている。

その理由は、①南北に長い長野県で、長野県立歴史館を見学で利用する学校が北信や東信、中信の北部地域に偏っていて、当館から距離のある南信や木曾地域からは来館しづらいという実情があること。

②体験活動の機会を設定して、歴史入門期の児童生徒の歴史に対する興味関心を高めたい、という願いからである。

小学校社会科の学習は、3年生から5年生の間に、児童の住む場所（小学校の学区）から市町村、県、そして国へと学習対象の範囲が広がっていくように組まれている。しかし歴史に関わるものに限定すると、2年生の生活科で「大きくなったぼく・わたし」という自分史を学習する単元、4年生で学習する「郷土をひらく」（地域の偉人について学習する）という単元があるだけで、日本の歴史を学ぶのは6年生ということになっている。学習する児童にとっては身近な地域との関連をほとんど感じることができず、これが「歴史には興味がない」「苦手だ」と歴史学習を敬遠しがちな児童の多さにつながっていると考える。



図3 実践報告 縄文人の服装で

そんな小中学生の児童・生徒が、長野県内の遺跡から出土した土器や石器を持ったり、地域の歴史を扱う特別授業を受けたりする体験を通して、当時の人々の営みに触れ、歴史をより身近に感じるようになっていく姿が本事業では数多く見られる。今回「知のフォーラム」に参加している方々にも実際に体験していただくことで、体験することのよさを味わっていただきたいと考えた。

お出かけ歴史館事業自体はまだまだ知名度が低く、また対象としている地域が歴史館から遠いこともあって、県内のどの地域でも歴史に興味をもてる機会を保障するには至っていない。博物館などの展示施設がなく、地元の遺物を見学できない町や村には中南信に限らず本事業を実施できるようにするとともに、土器持ち体験等ができる市町村については、地元教育委員会への紹介も念頭に置いて事業を進めていきたい。



図2 実践報告 本物の土器とともに

#### 4. おわりに

現代社会におけるインターネットの急速な普及、ネットワークを通じた情報提供の進展に伴い、組織の枠組みを超えるMLA連携の重要さは、誰もが認めるところである。

このフォーラムは、その連携を進めるという大きな目標・目的から出発している。ただ、各組織で扱う資料の特性や扱い方には違いがあり、予算・人員など様ざま理由からデジタル環境の整備状況にも違いがみられる。このフォーラムの目的を進めるためにも、各組織の参加については、各組織業務に支障が出ないように、できる範囲でということを通理解として活動していくことが大事と考える。今後も当館は、各機関の存在目的、独自の役割等を理解しながら、連携活動に参加していきたい。

最後に、コロナ下におけるフォーラムが無事開催できたことについて、企画検討・参加募集にご協力頂いた県立長野図書館、信州大学附属図書館、長野県立美術館の皆様、そして何より感染対策にご協力いただいた当日参加者の皆様に深く御礼申しあげる。

---

#### 参考

- 当館の活動につきましては、公式ホームページをご覧ください。  
<https://www.npmh.net//>
- 今年から館公式ツイッターを始めました。  
[https://twitter.com/official\\_NPMH](https://twitter.com/official_NPMH)